

中国語辞書研究の

回顧と展望

周 薦・楊 世 鉄

(訳||村司香子)

一 改革開放後三〇年の中国辞書事業の 発展

(一) 改革開放後三〇年における辞書出版と 辞書研究の成果

1 辞書の豊富な出版点数、種類の完備、多くの良書
対外開放や社会の安定は辞書出版の良好な社会的基礎と
なった。辞書学理論の発展もまた辞書編纂に強力な理論的
指導を与えたほか、「国家辞書賞」が創設されたことはこ
の時期の辞書出版に対して大いなる励みとなった。

周偉良の統計によると、一九八〇年から一九九一年に全
国で出版された辞書は二四〇〇点近い。一九九二年から二

〇〇一年に全国で出版された辞書は五六〇〇点余り、そし
て二〇〇二年から二〇〇三年に全国で出版された辞書は一
二〇〇点以上である。改革開放以来、わが国の辞書出版点
数は年々増加していることがここから見てとれる。

すでに出版された辞書の中に優れたものは少なくない
が、中でもわが国の辞書レベルを最も代表するのは「国家
辞書賞」を獲得した辞書である。

優秀な辞書を奨励し表彰するために、一九九五年から中
国辞書学会による「中国辞書賞」の評議・選出活動が開始
された。国語辞典、二言語辞典および専門用語辞典の三部
門が設けられ、隔年に一度選出される。一九九九年までに
は「国家図書賞」は「国家辞書賞」と名を改めその後を引
き継いだ。この活動はすでに七期にわたって開催されてお

り、はじめの五期で審査を受けた辞書はあわせて七一三点、選出された優秀辞書は一六六点にのぼる。例を挙げる」と『辞海』、『現代漢語詞典』修訂本、『新華字典』、『中国大百科全書』簡明版、『漢語大詞典』、『漢語大字典』簡明本、『漢英詞典』修訂版、『英漢大詞典』、『古漢語常用字字典』、『漢英詞典』、『現代漢語方言大詞典』、『現代漢語規範字典』などである。これら賞を獲得したものには、この時期に新編されたもの（『現代漢語方言大詞典』など）や、以前に編纂された辞書を改訂したもの（『辞海』など）、またこの時期に編集されたのちさらに改訂の加えられたもの（『中国大百科全書』簡明版など）がある。国家辞書賞を獲得した辞書はすべて高い学術価値と実用価値をあわせ持ち、改革開放以降の辞書編纂と出版における突出した成果であり、わが国の現代の辞書を代表する最高レベルのものである。

このほか、二〇〇八年一月に第一回中国出版政府賞が表彰されたが、そこで四点の辞書が賞を獲得した。商務印書館の出版による『現代漢語詞典』第五版と『故訓匯纂』、中国社会科学出版社の出版による『中国歴史地名大辞典』および上海教育出版社の出版による『古文字詁林』である。他にも七点の辞書がノミネートされていた。

2 盛んな理論研究

改革開放後の三〇年において、辞書出版の猛烈な発展に

伴いわが国の辞書理論の研究もまた大きく発展を遂げた。大まかな統計によると、この三〇年で発表された辞書学論文は一万二千篇余りで、内容は辞書の編纂方法から辞書史、辞書の特性、辞書の分類、辞書の批評、辞書学と言語学の関係、辞書編纂の中国化、辞書の規範化など多岐にわたる。具体的には、辞書学の理論研究は以下のいくつかの面に表れている。

(1) 各地での辞書研究会と辞書研究センター(研究所)の相次ぐ設立

学会は学術研究と討論を組織する重要な機構である。ある学問がどの程度発展しているかというのは、その学会組織が健全であるかどうかや、その活動の多少によって計ることができる。

一九九二年一〇月、中国辞書学会は北京で発足大会を開催した。このうち、この学会の各専門委員会が徐々に設立された。一九九三年九月、国語辞典専門委員会と辞書編集出版専門委員会が創設され（北京）、同年一月には二言語詞典専門委員会が創設された（広州）。一九九四年九月に専門用語詞典専門委員会が創設され（上海）、同年一月には辞書理論と辞書史の専門委員会が創設された（上海）。二〇〇一年四月には辞書編纂現代技術専門委員会が創設された（上海）。これ以前にも省を単位とする地方レベルでの辞書学会が数多く設立されており、その中で一九

八二年に創設された上海辞書学会が全国で最初の辞書学会である。その後、福建省辞書学会や陝西省辞書学会、安徽省辞書学会などが続々と設立された。

これ以外にも、全国各地で多くの辞書研究機構が設立されている。南京大学双語詞典研究中心（一九八八年）、商務印書館辞書研究中心（二〇〇〇年）、広東外語外貿大学詞典学研究中心（二〇〇一年）、南開大学詞匯学与詞典学研究中心（二〇〇三年）、厦門大学双語詞典与双語語言文化研究中心（二〇〇三年）、上海交通大学翻訳与詞典学研究中心（二〇〇四年）、漢語辞書研究中心（二〇〇七年）、教育部語言文字信息管理司と魯東大学により魯東大学内に共同設立）、上海海洋大学翻訳与詞典研究所（二〇〇八年）などが挙げられる。これら学会と研究センターは、設立後、定期・不定期を問わず辞書編纂や理論研究の方面での学術会議を開催している。部分的な統計によると、現在までに開催された学術会議は中国辞書学会設立後のものだけでも五七回を数える。このほか一九九四年と二〇〇二年には、上海と広州においてそれぞれ専門用語辞典編集学習クラスと辞典学理論講習クラスが開催されている。このような全国的な学術会議は研究対象となるテーマが非常に広範囲にわたる。ある一冊の辞書をテーマとして研究討論するもの（『現代漢語詞典』学術研究討論会など）や、ある一種類の辞書を対象として研究討論するもの（二言語辞典

学術研究討論会、専門用語辞典学術研究討論会、国語辞典学術研究討論会など）、さらにすべての辞書を対象とする研究討論（一九九九年一月に南京で行われた中国辞書学会第四回年会など）等であり、編纂技術に関する研究討論（二〇〇一年五月に北京市平谷で開催された『俄語新詞新義詞典』編纂研究討論会）や辞書理論をテーマとする研究討論（一九九九年六月に安徽省黄山で行われた第三回辞書理論研究討論会）なども挙げられる。こういった各種さまざまな学術活動の展開により、わが国の辞書学理論研究は飛躍的に発展している。

このほか、一九九七年三月には香港においてアジア辞書学会が設立され、同時に第一回アジア辞典学会議が開催された。二〇〇四年には台湾翻訳学会が台北に「詞典及語料庫研究中心」を設立、同年六月には第二次学術会議を開催した。このセンターが台湾における最初の辞典学研究機構である。

(2) 『辞書研究』の創刊と『詞典研究叢刊』の出版

一九七八年に上海辞書出版社が設立された後、一九七九年五月に『辞書研究』という雑誌が創刊された。その後数度にわたり辞書理論がテーマに取り上げられ、大討論が繰り広げられた。例を挙げると、辞書編纂の階級性、辞書編纂の中国化、辞書学の学問的地位、辞書と規範化などである。この雑誌はこれまでに一七〇号余りを刊行し、その中

で多くの辞書学論文を発表しており、辞書研究における一つの重要な拠点となっている。このほか四川人民出版社（後の四川辞書出版社）もまた一九八〇年に『詞典研究叢刊』を創刊した。これは主に国語辞典を研究対象としたもので現在すでに一二号が刊行されている。『辞書研究』として、『詞典研究叢刊』の創刊は、「多くの辞書に携わる人々に対して、経験を総括し、辞書編纂の法則を検討し、また中国辞書史と外国辞書史を研究する活動の場を提供すること³⁾で」、わが国の辞書編纂業務と辞書学理論研究にとって大いなる推進力となった。

(3) 重要な研究拠点の形成

辞書研究は辞書編纂から始まったが、これはわが国の辞書研究の顕著な特徴である。はじめに大型辞書の編纂に関わった省や大型辞書を出版した都市では、それと同時に学者らが理論研究を展開した。彼らは、科学研究所や大学でただ研究に従事しているだけの学者らと比較すると辞書研究に対する関心はより高く、雑誌の創刊や専門のテーマについての研究討論を行うなどして、この新興学問を盛り上げた。この影響を受け、彼らの所在する上海、武漢、北京、四川、福建、安徽などの地区は、わが国の辞書研究において重要な研究拠点となったのである。

(4) 辞書学専門書的大量出版

三〇年来、わが国の辞書学理論研究が見せた大きな進展

の一つに、大量の辞書学理論書を出版したことがある。おまかな統計によると、この時期の辞書学著作は七十点余りである。この数字は多くないように思えるが、わずか数十年の歴史しかないうえに従事する研究者も多いとは言えない、始まったばかりの学問からすると、これは相当大きな成果であると言える。

このような専門書は非常に幅広く、著作の形式も著作あり翻訳ありとさまざまで、またその内容は辞書学のありとあらゆる方面に及んでいる。ここに比較的代表的なものを挙げると（各年一冊ずつ出版年度順に）、胡明揚ほか『詞典学概論』（一九八二年）、劉葉秋『中国字典史略』（一九八三年）、陳炳迢『辞書概要』（一九八五年）、錢劍夫『中国古代字典辞典概論』（一九八六年）、黃建華『詞典論』（一九八七年）、李開『現代詞典学教程』（一九九〇年）、陳炳迢『辞書編纂学概論』（一九九一年）、林玉山『中国辞書編纂史略』（一九九二年）、黃文興ほか『辞書類典』（一九九三年）、王粵漢『釈義簡論』（一九九四年）、林玉山『辞書学概論』（一九九五年）、王瑛『常用漢語辞書学要』（一九九六年）、趙振鋒『辞書学綱要』（一九九八年）、姜治文・文軍『詞典学与双語詞典学研究』（一九九九年）、林玉山『中国辞書排檢史』（二〇〇〇年）、涂建国『漢字排檢法概論』（二〇〇一年）、涂金法『中国辞書發展史引論』（二〇〇二年）、雍和明『國際詞典学』（二〇〇三年）、林玉山

の編集による『工具書学概論』(二〇〇四年)、魏向清『双語詞典訳義研究』(二〇〇五年)、雍和明ほか『中国辞典史論』(二〇〇六年)、陳偉『翻訳と詞典間性研究』(二〇〇七年)などである。

辞書学専門書の出版はこの時期の辞書学理論研究のレベルを集約したものである。

この時期には辞書学論文集も多く出版されている。個人のものとしては主に、汪耀楠『詞典学研究』(一九九〇年)、郭良夫『詞匯与詞典』(一九九〇年)、張志毅ほか『詞和詞典』(一九九四年)、周志鋒『大字典論稿』(一九九九年)、蘇宝榮ほか『詞義研究与辞書积義』(二〇〇〇年)、程榮『字・詞・詞典』(二〇〇一年)、鄒艷『辞書学探索』(二〇〇一年)、および『辞書学叢稿』(二〇〇四年)、周薦『詞匯学詞典学研究』(二〇〇四年)、符淮青『詞典学詞匯学語義学文集』(二〇〇四年)、吳建平『辞書学与双語詞典学探索』(二〇〇五年)などが挙げられる。

広東外語外貿大学詞典学研究中心と上海市辞書学会、『辞書研究』編集部が共同で編纂した『二十世紀中国辞書学論文索引』(上海辞書出版社、二〇〇三年)はわが国の二〇世紀辞書学研究成果の集大成で、ここに収録されている大部分は改革開放後のものである。

(5) 国外の辞書学理論の紹介

わが国の辞書学の起こりは比較的遅く、改革開放以前に

は国外の研究はあまり知られていなかった。しかしこのような状況はこの三〇年間で大きく変化した。改革開放後、中国と世界との関係は緊密になり、文化の交流はますます盛んとなった。辞書の出版と研究の分野においても、世界的に有名な辞書の導入・出版(『朗文当代高級英語辞典』、『牛津高階英漢双解詞典』第六版など)だけでなく、国外の辞書学理論著作の翻訳(ラ迪斯斯拉夫茲古斯塔(Ladislav Zgusta)による『詞典学概論』(一九八三年)や石肆壬による『詞典学論文選訳』(一九八一年)および陳炳迺による『国外現代辞書選介』(一九八六年)など)も行われた。辞書学者は国外の辞書学の研究状況に対し、より一層関心を寄せるようになり、それらを国内に紹介するようになった(例えば、徐海がハ特曼(Hartmann)の『詞典学教学与研究』(*Teaching and Researching Lexicography*)を紹介した「詞典学学科建设的重要著作——「詞典学教学与研究」介紹」、吳建平が『詞典学詞典』(*Dictionary of Lexicography*)を紹介した「讀「詞典学詞典」」、文軍が『專科詞典学手冊』(*Manual of Specialized Lexicography*)を紹介した「積極型專科詞典理論の有益探索——介紹「專科詞典学手冊」」、吳哲が杜比欽斯基(Dubychinski)の『理論与实践詞典学』と阿普列祥(Apresjan)による『世界的語言図景与系統詞典学』を紹介した「一部值得関注的詞典学新作——「理論与实践詞典学」(俄文版)評介」、「整合一体描写

及其对双語詞典編纂創新的啓示——兼評「世界的語言図景与系統詞典学」など。

国外の辞書学研究状況を紹介したものは、金常政の「百科全書二〇世紀行」、黄小莉の「詞典編撰の研究現状概述」、武継紅の「浅析理論詞典学的發展」、胡開宝の「国外当代詞典学研究述評」、雍和明の「国外詞典類型學理論綜述」、曹傑旺・羅思明的「当代理論詞典學主要流派」、魏向清・張柏然的「新世紀詞典學理論研究趨勢展望」、王馥芳・羅敏莉の「語料庫詞典學的興起与發展」、何家寧の「詞典使用研究述評」、孔慶成・黃麗萍訳、倫納德・E・紐厄爾 (Leonard E. Newell) の「菲律賓詞典學發展現狀」、郭世英の「英國埃克塞特詞典研究中心」、黃永安の「艾希特大學詞典研究与英國詞典學發展」、黃建華の「加拿大魁北克詞典編纂動向的啓示」などがある。

国外の辞書研究に関する紹介は、百科事典、用語の解釈やその解釈モデル、辞典學理論、辞典學研究の現状、国外の辞典分類理論、辞典學の流派、辞典學的發展動向、コーパスの構築と辞典編纂の關係、辞典の使用・研究狀況などが含まれる。翻訳の形式で紹介されたものもあるが、多いのは翻訳紹介の形式である。なかでも武継紅の著作は辞典學構築において理論上の指導的意義を持つものである。このほか、黃建華はカナダケベック辞典編纂の際の経験を紹介した後、我々が今後現代漢語詞典を編纂するにあ

たっては開放的な態度で臨むべきだと提案した。香港や台湾、シンガポールなどで使われている中国語も考慮に入れ、「条件が整った時、国内外各方面が一致協力し同時にグローバルな中国語大辞典を作り出す」べきであると提起したのである。

国外の辞書学研究の紹介によって国内の学者は最新の研究動向について知ることとなり、視野が広がり研究はより深く広く行われるようになった。わが国の辞書學は比較的短い期間に起こり成長を遂げたと言えるが、これは学者らが国外の辞書學理論を紹介し、また我々の辞書研究が国外と同時に性を保っているということが密接に関わっている。

(6) シリーズ辞書の編纂規程の制定

わが国の辞書編纂の規程化は一九八〇年代中期に始まり、一九八六年四月に全国術語標準化技術委員會辞書編纂分委員會が設立されその象徴となった。

この委員會は成立以来、辞書編纂の規程化にまつわる多くの活動を行っている。この分会は設立後まもなく『辞書研究』の一九八七年第四期に「辞書編纂与標準化研究專輯」を発表し、のちに『現代術語学与辞書編纂』（科学出版社、一九八八年）を翻訳した。その後、辞書編纂に関する国家規程をいくつか制定・改定した。例を挙げると、GB/T 11617-2000「辞書編纂符号」、GB/T 15238-2000「辞書編纂基本術語」、GB/T 15933-1995「辞書編纂常用漢語

縮略語「GB/T 19103-2003『辞書編纂的一般原則与方法』」などである。

上述の規範および辞書編纂・出版に関わるその他の国家規範は、辞書編纂の規範化に科学的根拠を与えたのである。

3 辞書学理論研究の注目すべき問題

(1) 辞書編纂の中国化問題

辞書編纂の中国化に関して議論が開始されたのは一九八二年である。『辞書研究』第六期に楊祖希の「中国式専科辞典の積義」が発表され、編集部はこの論文中の提議に基づき辞書編纂の中国化問題について討論を展開した。これより、辞書編纂の中国化は八〇年代初期において注目すべき問題となった。

多くの人が『辞書研究』の中でこの討論に参加した。閔家驥（『辞書中国化小議』一九八三年第一期）、王知伊（『試析『辞書編纂中国化』』一九八三年第二期）、楊祖希（『对我国辞書編纂中国化的浅見』一九八三年第二期）、梁式中（『評『中国化』』一九八三年第三期）、舒辛（『明確辞書編纂中国化的内涵』一九八三年第三期）、尚丁（『我国辞書編纂的道路和特点』一九八三年第四期）、劉慶隆（『中国化、借鑑与国際化』一九八三年第五期）、祝注先（『中国化“問題浅見”』一九八三年第六期）、陳增傑（『大型語文詞典編纂中国化之我見』一九八三年第四期）、盧潤祥（『辞書選題

与中国化的実践』一九八三年第六期）等である。意見は大きく三つに分けられる。一つは、『辞書編纂の中国化』とは中国の風格を持った辞書編纂、つまり中国的な特徴を持つものという考えである（祝注先、閔家驥）。二つめは、『社会主義中国の個性や特徴などがあるからといって、中国化であるとは言えない』「いわゆる中国化という表現は不適當で、理論的には成り立たず実践も不可能である」（梁式中）。三つめは、「わが国の言う辞書編纂の中国化とは、独自の道を進むことであり、中国の特色を出すことである」が同時に、「決して古今東西の辞書編纂経験に対して虚無主義的態度をとることや、『排他主義』『尚古主義』の覆轍を踏むことを意味するのではない」（楊祖希）。このほか、一部の学者の『辞書編纂の中国化』はマルクス主義を指導的思想とすべきであるという考えに対して、尚丁は「マルクス主義を指導的思想とする」というのは辞書特有のものではなく、また「中国化“専有の属性でもない”と指摘している（『我国辞書編纂的道路和特点』一九八三年第四期）。

『中国化』とは一つの学術的主張であり、多くの問題の上に表れている。この問題に対する見方はより広い背景のもと討論することができる。辞書編纂の中国化に対して、我々は『中国の風格』や『中国の特色』を強調するがために国外の優秀な辞書編集の経験という手本を軽視してはな

らないと言える。この討論の中でこの点は皆のほぼ一致した意見である。

(2) 辞書規範に関する問題

この問題に関する討論は主に一九九〇年代に集中して行われ、辞書学者や言語学者が参加した。主な観点は四つである。一つめの観点は、既存の、問題ある規範は超越することができるといふものである。陳原が指摘したように、「辞書は国家標準と完全に一致するものではなく、また国家規範と完全に一致するものでもない。辞書の編纂者は国家規範の指導のもと、学術研究の基礎に立ち、あえて規範の超越を行うべきである。辞書はユーザーに対し非規範的な情報を提供すべきなのである。言い換えると、辞書は一般的な状況下では（小学生用の小字典類といった特定の場合を除き）現在の規範の中では説明できない、また収まりきらない描写や推論を与えることができるのである」（『辞書与語言規範化問題』『辞書研究』一九九九年第二期）。一つめは、規範型辞書は既存の規範を厳格に遵守すべきである、というものである。この観点を主張する代表的人物は李建国で、彼の言うには「国家が公布した言語と文字の法規や標準、また辞書編纂の専門用語や記号標準などは、一般的な辞書であれば編纂者が多少融通をきかせることは可能である。しかし規範型国語辞書の編纂者は、徹底的にその規定に照らし合わせ事に当たらねばならない。

この道理は非常に簡単で、なぜなら彼らは規範型辞書の編集者だからである。国家標準の不完全な箇所や、実際の言語使用状況より立ち遅れた部分については討論や研究を行うべきであるが、彼らは基準が改訂されるまではそれに服従し、守ることしかできず、個人の意見はその基準が改訂される際の参考となるのを待つしかない」（『規範型語文辞書の理論思考』『中国語文』一九九九年第一期）。一つめは、規範はあくまで剛柔を兼ね備えるべきであるという原則に立ったものである。最も代表的なのは高更生で、彼は規範型字書の編纂において二つの傾向を避けなければならないと指摘する。「一つは硬直した原則を機械的に強調することであり、もう一つは過度に柔軟な原則を強調することである」。彼は剛柔を融合すべきであり、規範の原則を堅持した上で頑なに原則にとらわれないようにと主張する（『剛性と柔性相結合の原則——談規範型字書の編纂』『辞書研究』二〇〇〇年第二期）。この観点は学術界では比較的代表的なものだが、ではいかにして剛柔の融合を成し遂げるかということについての認識は一つではない。四つめは、ごく少数の学者の、辞書編纂の過程において規範的基準は遵守する必要がないという認識である。「辞書（国語辞典であっても）編纂における規範的基準はあってもよいが必ずしも必要というものではない。すべての辞書編纂において規範的基準を遵守させるとするのは理論的に筋が通

らず、実現も困難であり不適當である⁽⁶⁾。この認識は少々危険であり、批判すべきである。

(3) 辞書の品質における評価基準

辞書の品質における評価基準の提起には二つの背景がある。一つは、『辞書熱』の高まりにつれ社会に多くの粗悪な辞書が出回り、辞書品質の評価基準に対する論議が引き起こされたことである。もう一つの背景は、学者が辞書の特性について研究する際に、辞書の特性を辞書品質の評価基準と見なす者が出てきたことにある。そこで辞書の特性とは何か、辞書の品質基準の評価とは何かといった論議を引き起こしたのである。この二つの論議は出発点こそ異なるが、最終的には一冊の辞書の品質をいかに評価するのかわという問題に行き着く。

この問題の主な論点は三つに集約される。一つは辞書の品質が低下した原因、もう一つはいかに辞書の出版品質を保つか、そして三つめは辞書の品質を評価する基準とは何か、である。辞書品質の評価基準に関して劉志榮は、あらゆる辞書は正確性と権威性、規範性という三つの特性を兼ね備えており、「どの角度から辞書を評価するかに関わらず、この三つの特性は辞書品質の評価の根拠となるべき基準である」としている。この三つの特性が比較的抽象的であるという見地から、彼はさらに「辞書品質を実際に評価する際は、評価の目的と要求に基づいて評価基準を具体的に

な項目に分け、審査可能な特定基準と評価内容を作り上げるべきである」と提起している（『辞書質量評価初探』『辞書研究』一九八九年第三期）。黄孝徳は、「辞書の品質基準はいくつかの規定によって言い表せるものではなく、全方位的でさまざまなレベルが存在する具体的な概念である。辞書の品質基準に対する一般的な認識は比較的抽象的で、原則的なものである。このような原則的な認識は特定の辞書の種類と結びつけて考える必要があり、実際の編纂段階で具体的な品質の要求を提起して初めて、実際に即した実行可能な品質基準となる」。「国語辞書、専門用語辞書、百科辞書、百科全書など、すべて各自で品質基準を持つてゐる。一つの固定的な基準で別種の辞書を評価することはできない」と言う（『論辞書の客観属性——也談辞書特性和質量標準』『武漢大学学报』一九九四年第四期）。このほか、魏世弟と李爾鋼は八つの評価基準を提起し（『論辞書特性与質量標準』『辞書研究』一九九〇年第二期）、鄒鄧は四つの基準を提起した（『漢語語文詞典質量評估標準試論』『辞書研究』一九九三年第二期）。

辞書の出版品質をいかに保証するかという問題もまた、この討論の重要なポイントの一つである。『辞書研究』だけでなく、劉慶隆「提高辞書質量的若干设想」（一九八四年第五期）、左大成「辞書出版工作的回顧与思考」（一九八九年第一期）、鮑克怡「制止辞書質量滑坡、努力提高辞書質

量」(一九九二年第五期)、王寧「辞書質量縦横談」(一九九四年第五期)、肖海波「提高辞書質量的一个關鍵」(一九九五年第四期)などの論文が発表され、李亜明も「建立辞書質量保障体系」(『編輯学报』二〇〇〇年第二期)ですばらしい提案を出している。まとめると主に以下の数点である。①辞書の編纂出版責任、辞書の出版管理のマクロコントロール、社会の監督、という三つのメカニズムを打ち立て、辞書の品質保証システムを作り上げる(李亜明)、②辞書研究を強化し、理論によって実践を指導する(鮑克怡・劉慶隆)、③二つの部隊の設立を推進する(鮑克怡・劉慶隆)、④計画性を強化する(劉慶隆・王寧)、⑤辞書の評論活動を強化する(王寧・劉慶隆・鮑克怡)、⑥立法を強化する(左大成)、⑦第一次資料を収集し保有する(肖海波)、⑧国家がプロジェクトとして編纂を行った重要な辞書の編集長と暫時その職を離れている主要編纂者らに対し、彼らの編纂した辞書を学術成果として認める(王寧)、⑨優良な辞書の改訂を強化する(王寧)。

(4) 品詞の標記

品詞標記は国語辞典の編纂を行う際に提起される理論的問題であり、編纂という行為により高度な要求をするものである。国語辞典の編纂の過程において語に品詞を付けるのは目新しいことではないが、中国語の複雑さと品詞研究の限界もあり、長きにわたり語に品詞を付けることは一種

の理想とされてきた。一九九〇年代に入り、品詞が標記された国語辞典の増加や品詞標記の過程における問題点が明らかになるにつれ、この問題に対する研究が盛んに行われ始めた。

討論は主に三つの方向から行われた。一つめは、品詞標記の困難な原因である。趙大明は国語辞典に品詞を標記する際に直面する難点は、主に二つあると考える。一つは「語と語でないものの区別、および語でないものにいかにして品詞を標記するかという問題」であり、もう一つは「兼類語か兼類語ではないかという問題」である(『漢語語文詞典標注詞性的難点』『辞書研究』一九九九年第一期)。郭銳は、品詞の標記には主に以下の問題点があると指摘する。「一部の語は用法が特殊で、分類が困難である」「一部の語は使用される構文の要素が確定しにくい」「一部の語は用法があいまいである」「一部の語は同一性の確定が困難である」などである(『語文詞典的詞性標注問題』『中国語文』一九九九年第二期)。陸俊明は、中国語の品詞の区分は「現在のところまだ学界で一致した同意や、全員が満足できる分類案や実行可能な具体基準を得られておらず」、辞典に品詞を標記する際に直面する最大の難点であるとしている(『有関詞性標注的一点意見』『語言文字応用』二〇〇四年第二期)。二つめは、形態素は品詞を明記する必要があるかどうかという点についてである。王世友は、「辞

書の中で一つの漢字に対し品詞を標記する場合、必ず音節と一音節の形態素を明確に区別し、形態素と語を明確に区別することを基礎とすべきである」と主張した（『現代漢語字典標注詞性的幾個基本問題』『辭書研究』二〇〇一年第四期）。趙大明は一つ一つの形態素の、各々の語義解釈すべてに語法の属性を記し、単独で用いられる形態素に付けられるものが品詞であり、単独で用いられない形態素に付けられるものが形態素の属性であると考えた（実際には〔主に名詞・動詞・形容詞の三種類である〕（『漢語語文詞典標注詞性的難点』『辭書研究』一九九九年第一期）。蘇宝棠は形態素に品詞を標記することに同意する。「国語辞典において形態素と語の効能を注意深く区別することは必要で、しかも適切な方法でもって区別しなければならぬ。しかしもし間違いを恐れて、一音節の形態素の品詞標記を取り消すべきであると主張するのならば、それは十分検討される余地がある」。彼はまたこのように考える。「実際に国語の国語辞典で、単独では語を形成しない形態素に付けられる品詞もまた「拡大」された「品詞」であり、こういつた「品詞」標記は形態素が語を構成した後の文法の効能を説明できるものではなく、主にその「内部関係」と「組み合わせの効能」を説明するものだが、しかし複合語の語義を理解するには非常に重要である（『詞性標注与「詞性」術語的「汎化」』『辭書研究』二〇〇六年第三期）。

三つめに、兼類語をいかに処理するかという問題である。陸丙甫はこのように考える。「基本語義が同じで名詞と動詞の両方の性質を兼有する語はかなり多く、項目が不必要に増加するのを避けるため、「名動詞」という分類を設ける。ただし基本語義が同じで名詞・形容詞の性質を兼有するものは非常に少なく、少数の特例に対し「名形詞」という分類は設ける必要はないであろう。このような語は各々処理し、二つの語に分け名詞と形容詞にそれぞれ分類するのがよいであろう」（『詞性標注問題兩則』『辭書研究』一九八三年第五期）。董秀芳の意見は陸丙甫と異なる。「一つの分類の中でごく一部のみ他の分類と重なる部分があれば、それは兼類として処理することができる」（『從謂詞到體詞的轉化——談漢語詞典標注詞性的必要性』『辭書研究』一九八三年第五期）。李爾鋼は、「辞典は語義解釈の項目や品詞に特殊な標記をすることでそれが兼類詞であるかいちいち読者に示す必要はない」と考える（『兼類詞的義項設置和詞性標注問題』『辭書研究』二〇〇六年第三期）。

この討論では一致した認識は得られなかったが、何名かの学者らが非常に価値ある意見を提起した。例えば郭銳は、現代中国語は異なる階層の要素から構成されると考え、「最良の処理方法は異なる階層の要素をすべて認め、かつその属する階層を明らかにすることであると考える。彼は辞典に品詞を標記する際、以下の点に注意が必要

だという。「全体を考慮し、調和のとれた品詞体系を確立する」「意義ではなく明確な文法の効能を区分の基準とする」「兼類語の処理は全体を通して考慮し、統一した処理を行うべきである」(『語文詞典的詞性標注問題』『中国語文』一九九九年第二期)。董秀芳は、辞典に品詞を標記する際、できる限り仔細に付すべきであると考ええる。例えば、動詞は他動詞と自動詞の小分類を考慮し、名詞という大分類のもとでは時間詞と方位詞を単独で標記するよう考慮するなど、辞典の中の句に対し特殊な標示をつけることができる(『從謂詞到体詞的転化——談漢語詞典標注詞性的必要性』『辞書研究』一九九九年第一期)。李紅印は、「品詞の標記は『項』によってすべきであり」「標記された品詞は積義や配列が一致すべきで、三つが合わさって語の文法効能が示される」と考える。馬彪と鄒韶華は、品詞を判断しにくい語に対して、「統計の結果によって基準をつくり、品詞標記の問題を解決する」ことを指摘している(『如何解決辞書中詞性標注的分歧』『語言文字応用』二〇〇二年第三期)。

(5) 工具書学確立に関する問題

『工具書学』の提起は『辞書学』よりも早くに起こったようであったが、その後鳴りをひそめていた。一九八〇年代初頭、辞書学の学問的性質やその地位について討論が始まると、工具書学を確立しようという声が再度起こってきた。

た。論者の身分という点で見ると、工具書学の確立を主張しているのは大多数が図書館界の学者らであった。彼らは主に一九八〇年代に集中してこの問題について討論し、のちにごく一部の学者のみがこの問題について再度提起したのである。

いわゆる工具書学は、「各種の工具書を総合的に研究する学問」である(戴克瑜・夏発奎らによる「工具書学初探」中『四川図書館学报』一九八二年第一期)。その研究対象は「各種工具書の生産・発展・編集・管理・使用に関する共通の規律と使用方法」(同前)で、その内容は非常に広範囲にわたり、「それはすでに確立された、また現在確立されつつある目録学・索引学・辞書学・要録学・年鑑学などを含む、図書館学・情報学・文献学・言語文字学・編纂出版学・コンピュータ応用学等々の学科(あるいはその分科)が互いに交じり合い組み合わせられて形成された新興の学問である」(董乃強「關於建立工具書学的幾個問題」『辞書研究』一九九七年第四期)。後に、肖宏発は先人の考えをまとめ、「工具書学学科結構体系」を作成した。その内容は非常に豊富で、社会科学研究のありとあらゆる分野をほぼ網羅している(『工具書学的建立』『図書館界』二〇〇二年第三期)。肖氏の観点は先人の観点の総括であり、工具書学の代表的な主張であると言える。

初期の工具書学の定義や研究対象という点から見ると、

工具書学は辞書学に相似しているが、ただ範囲はさらに広い。後に学者が確定した工具書学の研究範囲から見てもやはり辞書学が含まれているようだが、辞書学はその中のごく一部の分類にすぎないのである。もし工具書学が本当に後者のようなものであれば、言うまでもなくこの先しばらくの間、工具書学が確立されることはないだろうし、将来においても確立は困難であると思われる。なぜなら一つの学問が形成され確立するには、大量で確実な研究による基礎が必要だが、現在一部の学者が主張する工具書学は一種の理論上の仮説にすぎず、多くの基礎的研究はまだなされていないからである。

(6) 辞書学の学問的地位とその性質

『辞書研究』創刊号の「発刊詞」の中にこうある。「辞書学は一つの学問として、わが国ではまだ育成過程にある」。これは一九八〇年代後期から一九九〇年代初期において、辞書学の学問的地位やその性質について研究を深めるにあつたの伏線となつた。

辞書学の学問的地位に対する認識に関して、主に以下の観点がある。一つめは、辞書学は一つの独立した学問である、という認識である。胡明揚らの考えによると、初期の辞書学は言語学の枝分かれにすぎず、「しかし現代の辞典編纂はすでに国語辞典に限定されず、さまざまな辞典が相次いで出されており、辞典学は言語学から離脱し一つの独

立した学問とならざるを得なかつた」（『詞典学概論』）。徐慶凱は以下のように述べている。「『辞書研究』の創刊は、わが国において辞書学が言語学から分化し、独立した道を歩み始めたことを一つの重要な側面から表している」（『論辞書学的独立性』『辞書研究』一九八九年第二期）。徐時儀もまた、辞書学は「言語学の中から枝分かれして確立された、一つの独立した新興学問であり、歴史的な必然性がある」と考える（『辞書学学科地位考探』『辞書研究』一九九〇年第五期）。陸嘉琦もまた同様の見解である（『從辞書学的研究内容看它的学科地位』『辞書研究』一九九一年第三期）。

徐祖友は、辞書学は今のところ独立した学問ではないと考える。なぜなら専門用語辞典学や百科全書学がまだ独立しておらず、「体系をなし、また国語辞典に比肩し得る独立した専門用語辞典学や百科全書学が誕生して初めて、辞書学が独立する日であると言える」（『辞書学的今天和明天』『辞書研究』一九九一年第二期）。

辞書学の学問的性質に関して、ある学者は、辞書学は交叉学問であると考え、曹聰孫はこのように指摘する。「伝統的な辞典学は言語学の一つの分科である。現代の辞典学は知識工学の下位学科として発展する可能性もある。私は、現代における辞典学そのものが一つの明らかな特色を持つ交叉学問であると考え」（『詞典学は一門交叉学

科』『辞書研究』一九九〇年第四期)。蘇宝榮は狭義の辞書学は「依然言語学の分科に属する」とし、広義の辞書学は「総合的・学際的・実用的な学問であり、文化学の領域に属する」としている(『辞書学的広義与狭義』『辞書研究』一九九〇年第四期)。

以上が辞書学の性質に対する認識であり、他にも多くの学者が『辞典学』の学問的性質に関して意見を述べている。その中で、黄建華・楊祖希は、辞典学は言語学の分科であると考え(黄建華『詞典論』、楊祖希「詞典学試論」『辞書研究』一九七九年第一期)。王徳春は、「辞典学は応用学問であり、交叉学問や総合学問ではない」と考える(『詞典学は応用言語学的重要分科』『辞書研究』一九九一年第一期)。鄭述譜は、「辞典学は理論学と応用学の両方の特性を兼ね備えている」と述べている(『語義学与詞典編纂』『辞書研究』一九八七年第五期)。

学者らの意見を総合すると、現在以下のような傾向にある。初期の辞典学は主に国語辞典の編纂およびそれに関する理論の研究であり、言語学との関係はかなり密接であったが、現在の辞書学は専門用語辞典や百科全書の研究も含まれ、それはすでに言語学の研究範囲を超えている。

(7) 辞書の特性

いわゆる辞書の特性とは、主として辞書と一般書籍との区別を指す。これもまたこの時期に討論の行われた重要な

問題である。

一九五八年、『辞海』の改訂の過程において、「政治性・科学性・通俗性」と「正面性・知識性・安定性」といった項目が編纂の原則として提起された。一九七九年、『辞書研究』の創刊号の中で「六つの性質」が辞書の品質の鍵となる、とはつきり示されている(堅持「六性」、保証質量)。同年第二期には、『辞海』の特性を論じた五篇の文章が発表された。巢峰の「試論辞書学的政治性——『辞海』編輯体会」、池哲の「辞典要有簡明性」、馮英子の「談辞書学的穩定性」、徐慶凱の「堅持辞書学的科学性」、楊祖希の「知識性——辞書学的中心」である。後の数年のうちに、政治性・科学性・知識性・安定性・簡明性(略称「五性」)が一般書籍と辞書を区別する特性であると見なされるようになった。

一九八二年、胡明揚らが『詞典学概論』の中で、辞典の「三つの基本的条件」すなわち知識性・科学性・実用性(略称「三性」)を提起した。後に陳炳迢は『辞書概要』(一九八五年)の中で辞書の四つの一般準則、すなわち科学性・知識性・安定性・実用性を提起した。

「六性」と「三つの基本的条件」および四つの「一般準則」は表面的には直接関係がないように見えるが、その内容は非常に一致するところが多く、述べられているのはどれも辞書と一般書籍とを区別する特徴である。この三つ提

起の相違により、さまざまな考えが引き起こされた。一九八七年、黄建華は『詞典論』の中でまず、胡明揚らが「三性」を辞典の「基本的条件」であるとすることに疑問を投げかけた。彼はこのように述べている。「この提起はなるほどすばらしいが、しかし辞書以外の工具書に対しても同様に「三性」を条件とすることができると。教科書も「三性」が必要ではないだろうか。このことから、「三性」は辞典のみに属するものではなく、辞典の特性であるとは言えない」。この時より、辞書学界で辞書の特性に関する討論が始められたのである。

一九九〇年、『辞書研究』第二期に発表された魏世弟・李爾鋼の「辞書特性和質量標準」において、「五性」あるいは「三性」は「どちらにも一冊の辞書が高品質である前提のもとでの一つの評価の基準」でしかなく、「辞書の『基本的条件』や『本質の属性』ではない」と指摘されている。彼らは「疑問を解く参考となる特性」「知識の集約的特性」「配列検索の特性」こそが辞書の特性であると考⁽¹⁾える。二年後、林玉山は『辞書研究』一九九二年第一期において「關於辞書性質的思考」を発表し、魏・李両名の「辞書の特性」と「辞書の品質基準」を分ける方法に反対の意を唱えた。彼は、二つは「呼称の相違にすぎず、その本質は同じである」と考え、辞書の性質を「一般性質」と「特殊性質」に分け、一般性質は知識性・科学性・簡明

性・実用性を含み、特殊性質は安定性・検索性・格型性・規範性を含むとした。

一九九四年、黄孝徳は辞書と一般書籍、あるいは辞書と一般工具書とを比較するという角度から辞書の属性を三つに分けた。彼は、以下のように考える。知識性や科学性、思想性は辞書と普通の書籍が共に有する本質的属性であり、備查性や概括性、安定性、便捷性は辞書と一般工具書が共に有する本質的属性である。そして規範性や条目性が辞書のみが有する本質的属性である（『論辞書の客観属性——也談辞書特性和質量標準』『武漢大学学报』一九九四年第四期）。

一九九六年、徐慶凱は魏世弟や李爾鋼、黄孝徳らの考えをふまえ、属性・特有属性・本質的属性の三つの概念を厳格に区分するよう主張し、「特有属性は属性の一種で、本質的属性は特有属性の一種である」と考えた。またこれを基礎として辞典の三つの特性を提起した。一つめは、「一定範囲内の語句を集め注釈の対象とする」。二つめに、「語句の注釈を通じて読者のその語句に対する疑問を解決する」。三つめが、「それぞれの語句とその注釈を単位として一つ一つ配列し、読者の検索の便を図る」。以上三つの特性の中で、「第二の特性が意義を決定するもの」で、「辞典の本質的特性」であるとしている（『詞典的特有属性和本質属性』『辞書研究』一九九六年第一期）。

後に、楊正業は完璧な辞書には次の二つの大きな特性が備わっていると指摘した。「一つは検索性で、辞書は調べられるものであって読むものではない」「もう一つは条目性である。いかなる学問の知識も、辞典の中ではすべて一つの項目に分けられた上で一定の方式によって配列されている」(中国——辞典的源)『四川師範学院学報』二〇〇一年第三期)。

以上辞書の特性を総括した文章以外にも、学者らによって辞書がある種の属性を持つか否かという討論が行われている。例えば、辞書における政治性などである。宋芳彦は、政治性は辞書の編纂法則ではないと考える。なぜなら「辞書の編纂に含まれるのは主に語の収集、積義と列挙という三つの作業である。一般的に、この三つの作業はどれも政治的観点の制約を受けるべきではない」からである。「政治性を編纂の法則とすることは、辞書の品質に裨益するどころか損害を与えるのみである」(政治性不是辞書の編纂規律)『斎魯学刊』一九八六年第六期)。徐慶凱はしかし、辞書編纂は政治性を十分考慮に入れるべきであると考へる。なぜなら「政治性は、辞書の品質と、社会における効果と利益を評価する最も重要な基準である」からで、「政治的にきちんとしてチェックを行うことは、当然辞書編纂に従事するものにとつて最も重要な任務となる」。彼はこう主張する。「辞書を編纂する各々の部分の中で、語の選

択や積義、配列という三つの部分すべてにおいて、注意深く政治的なチェックを行うべきである」(「把好政治関」『辞書研究』一九九二年第三期)。

(8) 剽窃と参考との区別

この問題に対する討論は一九九〇年代に集中しており、主に王同億事件によって引き起こされた。一九九三年一月広州で開催された「中国辞書学会第一回年会および第四回全国辞書学シンポジウム」と一九九四年一月に上海で開催された「中国辞書学会辞書理論と辞書史専門委員会成立大会および第一回学術シンポジウム」ではともにこの問題を主要な討論の内容としている。

この問題に対し意見を発表する学者は大変多く、その中でも「辞書研究」に論文を発表した学者は、徐成志(「堅持辞書編纂中的実践論——兼駁「共識說」」一九九五年第三期)、符准青(「略論詞典積義中的敬称和抄襲」一九九五年第三期、「抄襲和借鑑」一九九五年第六期)、王寧(「簡論辞書の創造性及其著作權——駁「共識」論与「共同精神財富」論」一九九七年第三期)、蘇宝榮(「認清辞書編纂工作性質、劃清借鑑与抄襲的界限」一九九七年第四期)、王德春(「編詞典要多一点創造性」一九九七年第四期)、周薦(「詞典積義、出處溯源和引例的借鑑与抄襲的分野芻議」一九九八年第二期)が代表的である。これ以外にもその他の刊行物の中で論文が発表されている。劉和平(「巧言令色

〔鮮以仁——評王同億的「共識」說〕『中國圖書評論』一九四四年第二期）などである。劉和平と王寧は語義と語義の解釈は異なるものであるという観点から、語義の解釈を語義と見なす「共識說」に対して反駁を行った。劉和平は以下のように指摘する。「語の本来の意味の理解に対してはおそらくコンセンサスが存在するが、語句を解釈するその言葉は、解釈を行う作者の精神の産物である。もし王同億氏のように故意に「共識」と「共識の説明」を混交し是非をあいまいにしてしまうと、偉大な作家の偉大な作品も著作権法の保護を受けることができず、堂々と剽窃できるということになってしまう」。周薦は積義の類型や語句の出典の根源、例文などから参考と剽窃に対する弁別を行った。例えば例文に関して、彼はこのように指摘する。例文は「一般的には参考にする、しないといった問題は存在しない。なぜなら文献中の例文はもとより捜し出すことは困難だが、多くの場合においてこの一例のみという状況は決してなく、全力を尽くして捜し求めるべきである（またそうしなければならぬ）。討論を通じて、学者らはこのように考える。辞書は學術論著や文芸作品と性質を同じくするものではないが、辞書もまた編纂物として同様に剽窃の問題を抱えており、「共識」を剽窃の言い訳とすることはあつてはならない。

(二) 存在する問題

改革開放後三〇年でわが国の編纂と辞書理論研究が得た成果は非常に際立っているが、しかし問題も少なくない。主に挙げられるのは以下のとおりである。

1 深刻な辞書の粗製乱造や剽窃

このような事態は主に一九八〇年代半ば以降に始まり、それを言い表す表現も多様である。でたらめに編集し乱造しているとか、剽窃したものであるとか、また世間を騙して名誉を盗む、などと言われ、鮑克怡はこの時期の辞書出版を「数が多く氾濫している」と形容している（「制止辞書質量滑坡、努力提高辞書質量」『辞書研究』一九九二年第五期）。

(1) 粗製乱造現象

粗製乱造は主に語の収録と積義において表れる。辞書の中には語の収録に対しての審査が甘く、収録すべき語を収録せず、逆に収録すべきでない語を収録しているものがある。例えばある国語辞典には「一本の筆」や「一冊の本」などといった区切りで収録されている。語の収録に比べ積義における問題はさらに多く、解釈が簡単すぎたり、大局的でなかったり、意味の区分が不適當であるなどといった問題が散見される。

(2) 大量の剽窃

辞書の編纂における剽窃で最も典型的なものは『王同億事件』である。

一九九〇年代から、王同億は前後して『語言大典』『現代漢語大辞典』『新現代漢語詞典』など数点の大型辞書を編集したが、その中の『新現代漢語詞典』は『現代漢語詞典』およびその補編と『古今漢語実用詞典』を六五%以上も写し取ったものであった。そして『語言大典』の中の成語は全部で五千項弱であったが、そのうち上海辞書出版社の『中国成語大辞典』から写し取ったものがなんと三七〇〇項以上あり、七五%を占めていた(巢峰『王同億現象』剖析『辞書研究』一九九五年第二期)。

実際、王同億事件は辞書の編集における一つの剽窃事件であったが、これより以前もこういった現象はすでに存在していた。ただこれほど狂気じみてはいなかったというだけである。例えば、関係機関が剽窃であると鑑定した辞書や読者に剽窃を指摘された辞書には以下のものがある。

万啓智ほかの編集による『新法編排漢語詞典』(新華出版社、一九八五年)、劉雨樵の編集による『党政幹部大詞典』(陝西人民教育出版社、一九八七年)、張錫坤の編集による『新編美学辞典』(吉林人民出版社、一九八七年)、呉山の編集による『中国工艺美术大辞典』(江蘇美術出版社、一九八八年)、曲欽岳の編集による『当代百科知識大

詞典』(南京大學出版社、一九八九年)、張占斌ほかの編集による『新版毛沢東選集大辞典』(山西人民出版社、一九九一年)。

王同億の編集による『語言大典』などに重大な剽窃が存在していたため、一九九三年、中国社会科学院語言研究所や商務印書館など五つの機関が法廷に告訴した。最終的に裁判所は王同億および海南出版社に敗訴を言い渡し、原告に対し公開で謝罪を行った上で経済的損失を賠償するよう求めた。これは当時の辞書編纂と出版界において、一層激しさを増していた剽窃の波がある程度抑制する作用があった。しかしこのような現象がこれでなくなつたわけではなかつた。数年後、王同億は再び『新世紀現代漢語辞典』『新世紀規範字典』『新世紀字典』などを出版したが、問題は依然少なくなかつた。このほか、『二〇〇三年辞書品質専門検査』で不合格とされた辞書は一九点あつた。新疆教育出版社の『多功能学生字典』、印刷工業出版社の『中華辞海』、黒竜江人民出版社の『現代漢語大字典』、学苑出版社の『現代漢語規範用法大詞典』などである。これら不合格の辞書における問題の一つが剽窃であつた。辞書学界から粗悪品を撲滅するにはこの先まだ長い道のりがある。

(3) 名実相伴わず

辞書ではないにもかかわらず、辞書と名を冠して出版するというのも辞書出版に存在する問題の一つである。

現在市場にはさまざまな「辞書」があり、名実相伴った本物の辞書もあるが、中にはただ看板を掲げて読者を釣るためだけのものもあり、この種の本は名前だけで実のものがないものがほとんどである。例えば、市場には多くの鑑賞辞典があるが、「大多数が文学・演劇・映画・美術などの原作に鑑賞文を加えて編集したもので」、「この種の辞典は作品の題名を見出し語としている、……しかしその解釈は一篇一篇の文章で、この種の鑑賞辞典と鑑賞文とをまとめたものは人民文学出版社の出版した『中国古典文学鑑賞叢刊』のように、どれもまったく同じである」⁽¹⁸⁾。その他の種類の辞典、例えば解説辞典・閲読辞典・故事辞典・名言辞典・贈言辞典などにはすべてこの問題が存在する。

こういった問題の原因は辞書学の概念が明確になっていないことと少なからず関係があるが、当然、より深刻な原因は各個人と出版社が利益追求のために市場の要求に迎合することによってもたらされる。

2 理論研究における二番煎じ現象

重複した研究が多くなると、多くの論文は新鮮さを失いがちになる。例えばこの三〇年間に発表された共通の論題の論文を探し出して比較した場合、多くの文章が構想から問題に対する認識、使用した資料に至るまで往々にして同じであることが多い。さらに辞書史の研究に関して言うなら、現在確認される論著は七部であるがこれらの論著の枠

組みはほぼ完全に一致する。「一般的にどれも簡単に古代辞書の發展概況を紹介した後、主に古代辞書の評価に紙面を割いており」、しかもその評価の内容はほぼ同様である。

方宝花・何華連の統計によると、二〇〇一年に発表された辞書学論文は四一六篇、二〇〇二年には五〇八篇、二〇〇三年には五七五篇、二〇〇四年には六三五篇、二〇〇五年には四一一篇、二〇〇六年には六二八篇が発表されており、全体的には増加の傾向にある。辞書学論文の発表数が増加傾向にあるというのはいよいことだと言える。それは辞書学が多くの関心を集め始めており、また多くの人々がこの研究に従事していることを意味するからである。しかし、発表される論文の数を重視すると同時に、その品質や目新しさに対しても重きを置くことが、この学問の発展にとって非常に重要なことである。

3 辞書史研究における無制限な漢語辞書の遡源

漢語辞書の起源問題は漢語辞書史研究における重要な内容の一つである。この問題に対し、現在比較的知れわたっている説は二つあり、一つは先秦時代の『史籀篇』をわが国で最も古い辞書とする説で、方厚枢・胡明揚・劉葉秋などがこの意見である。方厚枢は以下のように述べている。「古くは春秋戦国時代に字書が出現している。『漢書』芸文志「小学」などに記載されている周宣王太史作の『史籀篇』は記録に残る中で最も古い辞書である」(『中国辞書史

中国の辞書の起源であるとするのでは、おそらく世間では受け入れられないであろう。

二 今後の中国辞書出版と辞書研究の発展の動向

1 人材育成の強化

辞書学の人材には辞書編纂要員と理論研究要員とが含まれる。全国的に見ると、辞書編纂の人員は總体的に非専門的で非学者型という特性があり、編集者の素質レベルはまちまちで編集グループは安定性を欠き、大抵が臨時で集められ、余暇を利用して編集に参加していることが多い。理論研究の人員は出版者を兼任している者が少なくない。彼らは出版に携わりながら研究を進めており、大学や研究機構で専門的に辞書学の研究に従事している者は非常に少数である。このごく少数の専門研究員のうち大多数は二言語辞典の研究に従事しており、全面的な辞書学研究に携わる人員はさらに少なくなる。

当然、このような状況には歴史的な要因がある。以前、わが国の辞書学要員の育成は「辞書出版の任務が辞書編集出版部隊の設立を牽引し、辞書出版事業の発展が辞書編集出版部隊の建設を促進する」という路線を歩んできた。²⁰しかし辞書学の人材育成はこの方法だけに頼るわけにはいか

話」上『辞書研究』一九七九年第一期)。もう一つは『爾雅』および漢代の『説文解字』などをわが国で最古の辞書とする説である。代表的な学者は郭文瑞(『辞書源流初探』『河北大学学报』一九八〇年第一期)と黄高憲である。黄高憲は以下のように述べている。「書物となった漢代の『爾雅』『方言』『釈名』『説文解字』はある程度の数の字と語を集め、一定の方式で配列した上で解釈を付して読者が検索できるようになっており、辞書の性質を有すると言える。これらがわが国最古の辞書である」(『試論『周易』与中国辞書の起源』『辞書研究』一九九一年第六期)。

この二つの説は同じではないが、基本的には事実と大きくは違わない。しかしながら一部の学者は漢語辞書の起源をさらに古いと主張する。例えば劉長允はこのように考える。「『易経』は辞書の形式に基づいて配列されている」ため、「『易経』は古い(あるいは原始的な)辞書である」(『従辞書角度看『周易』』『辞書研究』一九八五年第六期)。劉長允の「『易経』説」よりさらに古いとするのが楊起予で、彼は「わが国の工具書は夏代以前の『黄帝歴』と『顛頊歴』が始まりであり、歴史は非常に長い」と考える(『建立工具書学芻議』『福建師範大学学报』一九八八年第三期)。中国の辞書の起源がより遡るのは悪いことではないが、しかしそれには十分な根拠を示さなければならぬ。証拠が不十分であるにもかかわらず、勝手に古い本を取り上げて

ない。言い換えれば、我々の辞書編集部隊と研究部隊は辞書出版事業に常に依存するのではなく、専門的人材を育成することによって辞書編纂と研究部隊の設立を推進していかねければならないのである。

一九八〇年代、国家新聞出版署は中国人民大学と中国社会科学院語言研究所などの機関と共同で二度の全国辞書編集研修クラスを開催し、辞書出版界のため一群の人材を育成した。これは一つの価値ある推進方法であり、特に現在大学にまだ辞書学という専門が設立されていない状況下では、辞書学に携わる人員が非常に不足しているという現状を解決し得る。しかし、研修や訓練の形式はまだ多様化が可能で、制度の設立も必要である。これに関しては、イギリスのエクセター大学辞書研究所 (Dictionary Research Center, University of Exeter) の方法が参考に値する⁽²⁶⁾。

総じて言えば、辞書学の発展の鍵は人材である。今後、辞書編纂要員と理論研究要員の育成はさまざまアイデアを用い促進されるべきである。これが辞書学会が今後努力すべき一つの方向であろう。

2 高品質な辞書を作り上げるという意識の必要性

「辞書出版の多い少ない、良し悪しは、ある意味その国家の文化レベルを象徴すると言える」。これは二つの意味を持つ。一つは、辞書の「多い少ない」は国家の文化レベルと密接な関係があるということ、もう一つは辞書の

「良し悪し」が国家の文化レベルに影響を及ぼすということである。

改革開放後の三〇年で、わが国の辞書出版は数の上では大きな発展を遂げ、「国は大きい辞書は少ない」といった局面は一定の改善がみられた。しかし品質上は少なからざる問題が存在する。今後このような局面を転換させるべく、辞書出版の数量を確保すると同時に辞書の品質も高めていかなければならない。

辞書の品質を高めるためには、高品質なものを作り上げるという意識を持ち、社会に対する効果と利益を第一に考えねばならない。これは辞書の編纂者と出版者が両面から力を注ぐことが重要であり、ハイレベルな編纂部隊と責任感ある編集部隊があつて初めて辞書の品質が確保されるのである。このほか、高品質な辞書を作り上げるには新しい辞書プロジェクトを強化するだけでなく、すでに出版された辞書の改訂作業にも注力せねばならない。良い辞書というのは往々にして一度の編集作業で完成したものではない。社会や学問の発展に合わせて絶え間ない改訂を重ね、前の版の誤りを正し、新しい内容を補い、それによって初めて辞書は社会の発展や読者の要求に合わせて発展することができるのである。わが国が開催した幾度かの国家図書賞の評議の中で、賞を得た辞書の多くは繰り返し改訂を重ねたものであつた。新たに人員を組織して編集作業を行う

よりも、既存の辞書に改訂を加えるほうがより容易に辞書の品質を高められる、ということがこれよりわかる。

3 かなめとなる理論問題に力を注いで討論を展開し、突破口を勝ち取る

数十年の努力を経て、わが国の辞書学の理論研究が以前に比べ大きな進歩を得たことは否定できない事実である。しかし、まだ研究すら始められていない問題や、ようやく提起されたばかりの問題が存在するというのもまた事実である。後者を例にとってみると、現在、辞書学の中で多くの専門用語はまだ統一されておらず、それぞれがそれぞれの理解で使用している。例えば「辞書」と「辞書学」。この二つの概念はどちらもいくつかの含意を持ち、しかもそれぞれのそれぞれの意味を各々が使用しており、一人の人間が一篇の文章の中で違った意味で用いるという場合もある。

専門用語の含意が明確でないと、その学問の健全な発展に影響するばかりでなく辞書の出版にも混乱をきたす場合がある。この三〇年間、辞書の出版は非常に混乱しており、一部の辞書に属さない書籍が辞書と名を冠して出版され読者を欺く場合がある。これは「辞書」という言葉に明確な定義がないことと少なからず関係がある。さらに言えば、これまで辞書の特性について討論がなされてきたが、未だ一致した認識が得られないのは、おそらく皆の考える「辞書」の理解が異なるということと関係するのではない

だろうか。

辞書学研究において、上記のような問題は少なくない。小さな観点から見れば、それは辞書学の中の一般的な理論問題であるが、大きな観点から見ると多くの問題は学問の成立に直接関わってくる。このため、今後の研究は専門用語を統一するなど重要な問題の共通認識を得ることに注力せねばならない。これは一つの学問が発展するための基礎である。

4 辞書の評論作業の科学的な発展

辞書の評論は理論研究に必要なだけでなく、辞書出版の健全な発展を確保するために大変重要である。以前の辞書の評論は「褒めそやす文章が非常に多く、書くにしても書きやすい。しかし誤りを指摘する文章は情実に妨げられて筆を下ろしにくく、その確たるものを採すためにやむなく分厚い原書を何度も繰返し読み返すことになる。千字ほどの文章を何度も考え直し、一字一句推敲を重ね、遠慮がちに、十二分に注意深く書いた上で、発表した後は反論や反駁、議論を吹きかけられたり絡まれたりということに備えねばならないのである」(金常政「取向偽劣辞書亮紅牌」『辞書研究』一九九七年第二期)。このような辞書の評論は辞書学理論の構築に無益であるばかりでなく、辞書の出版を正しく導くことができず、かえって粗製乱造の気風を助長してしまう。このため、今後、辞書の評論をさら

に強化すべきであり、評論の科学性とその価値に気を配らねばならない。

5 国外辞書界との交流の強化

国外辞書学の研究の進展に注目し、国外の同分野との交流を深め、その先進的な経験から学び取ることが必要である。辞典学は一つの学問としてただ国内の辞書編纂経験の総括と紹介だけに留まっているのではなく、国外の辞書編纂の経験を参考にし、国外の辞書学会との連携も密にしていかなければならない。

かつては辞書編纂の中国化を提起していたが、これからは「グローバル化」を強調すべきである。

これに関しては、国内の外国語教育と研究に携わる学者が先頭に立ち、国外の辞書界の情報を紹介してくれた。しかし残念なことに外国語研究者と漢語研究者の間には越えることのできない境界があるようで、互いの交流は乏しく、それぞれが独立した学術圏を形成している。事実、国外のやり方で我々が学ぶべき価値があるものは多い。

6 辞書のデジタル化推進

コンピューター技術の急速な発展と広範囲な応用に伴い、「辞書の編纂手段もまた筆・墨・紙・硯を使い、カード・曖昧さをシンボルとした手作業の歴史に別れを告げ、コンピューター・コーパス・データバンクをシンボルとした自動化の時代に突入した⁽²³⁾」。このため、今後の辞書編纂

と理論研究は辞書のデジタル化を重視せねばならない。辞書のデジタル化作業には二つあり、一つは理論研究でもう一つは辞書編纂のデジタル化である。

理論研究は辞書のデジタル化の意義や実現へのルート、また存在する主な技術的問題やその解決方法、版權問題および辞書デジタル化の発展史などが含まれる。辞書編纂のデジタル化には大規模コーパスの開発や紙媒体の辞書のデジタル化、電子辞書の開発等が含まれる。

注

〔1〕「辞書市場的演変過程与圖書出版の專業分工」『辞書研究』二〇〇四年第四期。

〔2〕上海辞書出版社の『二十世紀中国辞書学論文索引』（二〇〇三年）と方宝花・何華蓮が『辞書研究』の中で発表した六篇の要約、および筆者が行った二〇〇七・二〇〇八年の論文の統計による。

〔3〕盧潤祥「辞書研究的現状与展望」『語文研究』一九九二年第二期。

〔4〕例えば、GB/T 10112-88「確定術語的一般原則与方法」、GB/T 15835-1995「出版物上数字用法的規定」、GB/T 15834-1995「標点符号用法」、GB/T 16159-1996「漢語拼音正詞法基本規則」。

〔5〕見臧宏の「“中国化”辨析」『安徽師大学報』一九九三年第三期。

〈6〉 汪人文「試談辭書編纂的規範性準則」『揚州職業大學學報』二〇〇〇年第一期。

〈7〉 徐麗娜による「中文工具書學科發展綜述」『河南圖書館學刊』一九九八年第一期、肖宏發による「工具書學的建
立」『圖書館界』二〇〇二年第三期。

〈8〉 戴克瑜らはかつてこのように述べている。「これが一つの専門的な学問であると認識されて、さまざまな異なるタイプの工具書について総合的な研究が必要であると指摘され、さらにその特有の研究対象が明らかになり始めたならば、それはこの学問がすでに誕生しつつあるということを示している。この学問の理論体系を完全に確立するのはそれからのことである」(『工具書学初探』中『四川図書館学报』一九八二年第一期)。この意見によると、学問を確立したいと思えば具体的な研究をすることなく、ただ考えるだけでよいということになる。そうなれば、誰もがあらとあらゆる学問の創始者になってしまうのではないだろうか。

〈9〉 一九八六年、果峰は「辞書研究」のこの五篇の文章に基づき、辞書の特性を五点に絞った。知識性・科学性・安定性・簡明性・思想性である。「辞書特性探索」『出版与发行』一九八六年第四期。

〈10〉 後に、李爾鋼はさらにもう一つの特性——概括詮釈性を追加した。李爾鋼「再論辞書特性与質量標準——兼答林玉山先生」『辞書研究』一九九三年第二期。

〈11〉 陶父の「一本抄襲之作——評『新法編排漢語詞典』」『辞書研究』一九八六年第五期。

〈12〉 「錯訛与抄襲」『中国図書評論』一九八八年第一期。

〈13〉 龔成生「評『中国工艺美术大辞典』」『辞書研究』一九九一年第五期。

〈14〉 果峰「王同億現象」剖析——一九九四年九月一日在中国辞書学会專科詞典專業委員會首屆年會上的講和「辞書研究」一九九五年第二期参照。

〈15〉 曉公「一部辞書因抄襲侵權而受处理」『辞書研究』一九九三年第四期。

〈16〉 徐慶凱「評王同億的假創新」『中国図書評論』二〇〇二年第五期。

〈17〉 「二〇〇三年辞書質量專項檢查」中發現的問題摘要『中国出版』二〇〇三年第一期。

〈18〉 蔡才宝「該給辞典一個什麼說法」『出版發行研究』二〇〇一年第三期。

〈19〉 雍和明「關於中国辞典史研究的思考」『辞書研究』二〇〇四年第二期。

〈20〉 石家金「对辞書編纂出版現狀的思考」『辞書研究』一九九〇年第二期に見る。

〈21〉 郭世英「英国埃克塞特詞典研究中心」『辞書研究』一九九四年第三期参照。

〈22〉 羅竹風「我們迫切需要一支辞書編纂隊伍」『辞書研究』一九八二年第五期。

〈23〉 「辞書現代化的新進展——中国辞書学会辞書編纂現代化技術專業委員會成立大会暨第二屆全国中青年辞書工作者學術研討綜述」。